

氏 名	井 上 充 幸
学 位 の 種 類	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	文 博 第 287 号
学位授与の日付	平 成 16 年 7 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	文 学 研 究 科 歴 史 文 化 学 専 攻
学 位 論 文 題 目	明 代 末 期 に お け る 江 南 の 文 人 に 関 す る 研 究

論文調査委員	(主 査) 教 授 夫 馬 進	教 授 杉 山 正 明	助 教 授 中 砂 明 徳
--------	--------------------	-------------	---------------

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、中国明代末期の江南における文人たちの日常生活に関する研究であり、なかでも彼らが強い関心を寄せた書画骨董の蒐集と鑑賞についての記録を手がかりとして、この時代の文化・社会のありようとその独自性について考察したものである。本論文は以下の四章から構成される。

第一章「文人に関する研究史のまとめと本論文の位置づけ」では、本論文の主要なテーマである、(1)「文人」という人間類型のありかたとこれが明末に変容したこと、(2)書画骨董の蒐集・鑑賞活動の担い手が、明末に至って宮廷から「在野」の人々へと移ったこと、(3)本論文の主要な舞台の一つである明末の江南都市である嘉興が、当時どのような文化的なまた社会的な位置を持っていたか、以上の三点について、各テーマに関する主要な先行研究を紹介しつつ本論文の論点を整理し、研究史上における位置づけを行っている。

第二章「李日華『味水軒日記』に見る文人の趣味生活—嘉靖から万暦年間の事例を中心に—」では、明末江南の一都市、嘉興に生きた李日華の『味水軒日記』の記事を通じて、江南文人の趣味生活の具体像と、当時の世相との関わりについて考察する。明末の江南では、経済的發展に伴い、文人から庶民に至る様々な人々の間で、書画骨董の愛好が大流行し、大規模な蒐集量を誇る「在野」のコレクターが多数出現した。李日華はその代表である。書画骨董は商品として盛んに流通し、需要の大幅な増加に伴い価格も急激に上昇した。同時に大量の贋作が制作されて市場に出回り、真贋の弁別は困難を極めた。これは中国史上において前代未聞の現象である。かかる世相を背景に、李日華は、その幅広い交友関係を通じて書画骨董を日々蒐集・鑑賞し、真贋の鑑定と作品の格付けを行うことによって、文人としての名声を確立していったのである。また、本章では、明末特有の新興知識人層ともいべき山人についても触れ、「士」と「庶」、「雅」と「俗」の境界線が揺らぎ、曖昧化していく時代の中で、李日華が伝統的な文人らしくあろうと努めた点についても言及する。

第三章「汪何玉『珊瑚網』に見る書画骨董の蒐集—万暦から崇禎年間の事例を中心に—」では、第二章の後を受けて、李日華ともゆかりの深い嘉興のコレクター汪何玉と、彼の著書『珊瑚網』の記述を中心に、嘉興における書画骨董の蒐集・鑑賞活動の盛衰について述べる。明代末期には、江南の諸都市に住む文人たちの手によって、書画骨董に関する専門書・題跋集・目録などの類が数多く著された。本章ではまず、汪継美・何玉父子の二代にわたるコレクションの形成とその散逸の様子につき、嘉興の他のコレクターとの関係を中心に追い、『珊瑚網』編纂に至るまでの経緯を述べる。また第四章と関連して、天啓末年に起こった「黄山の獄」を通じ、徽州と嘉興の関わり的一端についても論じる。崇禎年間に至り、汪何玉は自らの書画の鑑賞記録をもとに『珊瑚網』編纂に着手し、書画に関する通行の諸本をふまえて校訂を加えたが、その際もっとも依拠したのが同郷の郁逢慶が著した『郁氏書画題跋記』であった。そして、汪何玉による書画骨董の蒐集・鑑賞には、鴛鴦詩社という嘉興の文壇サークルが重要な役割を果たしており、明代を代表する題跋集である『珊瑚網』成立についても、詩社の同人たちが大きく寄与していた、とする。

第四章「徽州商人と明末清初の書画骨董売買をめぐる一呉其貞『書画記』を中心に—」では、第二章・第三章と関連し

て、明末の江南における書画骨董の流通を担った徽州商人の活動について述べる。徽州の書画商人の呉其貞による鑑賞記録『書画記』は、明の末期から清の初期にかけて、書画骨董コレクションの動向に深く関わった彼らの具体像を知る上で、格好の史料である。とりわけ嘉興は徽州出身者との関わりが深く、当地での書画骨董の蒐集・鑑賞活動を外部の視点から捉える上でも、『書画記』の記述は有益である。明末の徽州は、蘇州と並ぶ書画骨董ブームの中心地であり、徽州の「巨姓大族」と称される人々は、莫大な商業資本と幅広い人脈を元手に、競って書画骨董を購入した。呉其貞とその一族も、地元の徽州をはじめ、江南各地の主要都市に商業拠点を築き、書画骨董の組織的な売買に携わったのである。ついで、第三章でも触れた天啓年間の「黄山の獄」をきっかけとして、徽州における書画骨董コレクションの散逸と流動化が進むなか、呉其貞の先輩である王越石の活動を多方面から追い、悪名高い徽州の書画商人たちの具体像を明らかにする。ついで、清代以降の呉其貞自身の活躍を追う。この頃彼は、故郷を離れて江南各地をくまなく巡り、書画骨董の取引に勤しむが、その中で、彼は一流の目利きとして文人たちのコレクションの指南役となり、彼らと対等の関係を取り結ぶに至る。従来、文人たちから卑しめられていた商人たちの情報・人脈なしには、この時期の書画骨董の蒐集・鑑賞は不可能であった。明清交代に伴う社会的混乱期は、彼らがもっともいきいきと活躍し、その地位を向上させた時代だった、と結論づける。しかし一方で、皇帝のお膝元である北京が、書画骨董の蒐集・鑑賞活動の中心地として再浮上し始め、嘉興や徽州をはじめとする江南諸都市の地位は相対的に低下し、彼ら商人たちの活動は一旦終息に向かうこととなる、と清代への展望を示す。

論文審査の結果の要旨

中国史上では明末、すなわち16世紀後半から17世紀前半にかけて、空前の書画骨董ブームが起こった。書画骨董とはもともと「文房清玩」、つまり士大夫たちがその趣味に応じて書斎に置き、愛玩するためのものにすぎなかったが、この時代にはそれは投機の対象となり、大コレクターらが多数誕生するとともに大量の贋物が出回った。明末には「士大夫」と「庶民」の区別や「雅」と「俗」の区別が曖昧化し、多くの庶民たちが形の上だけでも文人たらんことを目指し、書画骨董の購入に参入してきたからである。ここにおいて、文字通り趣味に生きて書画骨董の真贋を見分けつつ、この方面で名声を確立してゆく文人たちを生み出すとともに、一方では同じく真贋を見分ける目を自ら持ちながら、文人たちから軽蔑される骨董商人、すなわち没落文人から安く買いたたいて転売し巨利を博するとともに、詐欺まがいの手段で売買したり贋作すら組織的に手がける商人を大量に輩出するに至った。本稿は、中国明末に江南地方を中心として起こったこの書画骨董ブームを背景に、そのコレクターとして趣味生活を送る文人たちの実態と、彼らを主要な取引相手とする商人たちの活動とを活写したものである。

論者が第1章で述べるところによれば、文人とは士大夫の私的側面であり、両者は同一人格の裏と表という関係にある。ただ本論文で登場し趣味生活に生きる文人たちにおいては、士大夫としての側面、すなわち政治とあるべき文化とに対して責任を負う者としての側面が極めて薄い。筆者はこの時代のキーワードとして「癖」という言葉を挙げる。それは単なる「くせ」ではなく、常軌を逸した趣味・嗜好のことであるとする。

論者が第2章で描いた李日華が、まさしくそのような文人の代表であった。彼は当時江南にあった2つの巨大都市、蘇州と杭州を結ぶ大運河のちょうど中間に位置する嘉興という都市に住んだ。彼は進士出身で中央官僚となった後に退職し、郷里で過ごすいわゆる郷紳であり、地主でもあった。したがって彼の日記『味水軒日記』には、たしかに郷里の土地制度や徴税制度にかかわる記述、あるいは官報を閲覧することによって得た全国各地の反乱についての記述も、あるにはある。しかし圧倒的に多くの記述は、書画骨董にかかわるものであり、彼の「癖」した姿をうかがうことができる。論者はこの日記を縦横に史料として用い、李日華が書画骨董に熱狂し趣味三昧の生活を送りつつ、ついに真贋の鑑定で名声を博するに至る様を描き出す。論者はさらに、当時流行していた「山人」の問題にも踏み込む。「山人」とは主に都市に住み隠遁者を装いながら、知識や技芸を元手にして生きていた者であり、その存在は「雅」と「俗」との混淆を最も象徴的に物語るものである。李日華自身が15歳のころ、エリートコースを自ら逸脱して「山人」になり勝手気ままな生活を送ろうとしたが、当時「山人」の代表格であった陳繼儒から逆に説得され、受験勉強を続けたとのエピソードを紹介しており、「文人」と「山人」との関係を考えるうえで興味深い。

第4章で論者が描いた徽州商人と書画骨董売買は、本論文の中でも圧巻である。徽州は安徽省中部の山間地に位置し、全

国的な商人「徽商」（新安商人）を生み出したところとして名高い。論者は呉其貞という徽州商人を主人公として、その書画骨董売買記録というべき史料をもとに、彼らの活動実態を考察している。論者によれば、彼は真贋を見抜く目を持つとともに、各種各様の贋物を組織的に制作していた。そして江南各都市に張り巡らされたネットワークを活用し、文人たちを相手に売買をしていた。「文人」のなかには彼に鑑識眼を養ってもらう者がいる一方で、当然のことながら俗物、ペテン師として彼を深くにくむ者がいた。この一章は、恐らく世界の学界で始めて、明末清初における徽州商人和骨董書画売買の関係を詳細かつリアルに描き出したものとして、高い価値を持つものである。

本論文はこのように明末の骨董ブームを文人と商人の二つの側面から考察したもので、すこぶる高い価値を有する。しかし、問題ももちろんある。最も問題とすべきは、論者の感ずる明末清初における書画骨董売買や文人の趣味生活の「おもしろさ」について、これをより客観化しようとする努力が、なお不十分であると考えられる点である。この点、かりに論者がそれから1世紀ほど後の18世紀後半、同じく間延びした感のある清朝乾隆時代の前後において、書画骨董をめぐる文人や商人の状況はどのようになったのかを念頭に置いて叙述していたなら、明末清初のそれをより説得的に示すことができたであろう。しかし、この問題もやがて論者によって取りくまれ、今後より大きな成果となって結実するものと期待できる。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2004年4月23日に調査委員3名が論文内容とそれに関連した事項について口頭試問を行った結果、合格と認めた。